



知をつなぎ、地を活かす

東北活性研

# コミュニティビジネス・ソーシャルビジネスの 事例調査

～岩手県奥州市における循環型ビジネスの事例～

報告書

2020年3月

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

1

---

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

2

東北の（日本の）ほとんどの地域で高齢化、人口減少が進んでおり、それに起因する地域課題（典型例：近くに商店や医院がない。公共交通機関がない。地場産業の後継者がいない。）が顕在化しています。また、近年、国連が提唱するSDGs（Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標、2015年採択）関連の活動（起業等）が盛んになっています。

このような地域課題への対処やSDGs関連の活動でよく見られるのがコミュニティビジネス（以下CB）、ソーシャルビジネス（以下SB）です。これらは昔からある言葉ですが、要するに、ビジネスの手法で（継続的に資金が回る形で）課題に対処しようとするものです。

（この2つの言葉は現在ほとんど区別されていません。また、ソーシャルイノベーションと表現されることもあります。）

諸課題に対して行政が税金で対処することは明らかに限界がありますから、CBSBによる対処が今後ますます盛んになっていくと思われま

す。本調査では過去の地域コミュニティ関連の調査と同様、ごく少数の事例を詳細に紹介することとしました。よく見られる、事例集と提言の組合せと異なるスタイルをとった理由は、そのほうが現場の方々が参考にする場合、自地域との状況の違いを踏まえることができると考えたからです。

本事例調査の第二弾は岩手県奥州市の事例です（第一弾は青森県大鰐町の事例）。奥州市では休耕田を利用して作付けした飼料米を使い、民間企業がイノールを抽出しそれを原料に化粧品を製造販売するとともに、イ

ノール製造の副産物である残さを鶏飼料に回し、それを与えた鶏の糞を食用米の肥料に回すという循環型ビジネスが行われています。この循環型ビジネスを構築したのはユニークな経歴を持つ東京在住の女性です。また、地元で根差した活性化活動のリーダー的存在の女性と前述の女性が中心となり循環型ビジネスに関係する人たちと一緒に団体を設立し、循環型ビジネスの視察を提供する交流人口拡大活動が行われています。本報告では、循環型ビジネスができた背景や経緯、交流人口拡大の活動を詳細に描写しました。

さて、2017年1月、東北6県および新潟県を対象とする将来像と戦略をとりまとめたビジョン『わきたつ東北』（一般社団法人東北経済連合会）が公表されました。このビジョンの3本柱の第一が「地域社会の持続性と魅力を高める」です。これは東北・新潟の発展の基盤が「地域社会」の充実であると解釈できます。

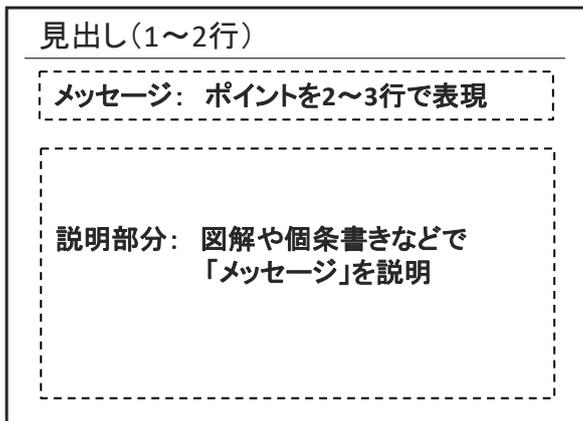
当センターの一連の地域コミュニティ関連調査ならびにCBSB調査が地域社会の持続性と魅力を高める一助になることを祈念いたします。

2020年3月

公益財団法人 東北活性化研究センター

東北活性化研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

## 本報告書の見方について



本報告書は、パワーポイントにて作成したシート(A4ヨコ)2枚を縮小して1ページ(A4タテ)に収め、PDF化しています。(ページ番号が1ページに2つ付いています。)

ほとんどの部分が、左図のような図解型の形式になっています。

- ・見出し(1~2行)
- ・メッセージ(1~3行): ポイントを簡潔に記述
- ・説明部分: メッセージを図解や個条書きなどで説明

場合により、下のシートに、文章による補足説明を施します。

ただし、例外的に、コラムなどは、上、下の区分なく文章になっている場合があります。また、下の部分が空きページになっている場合もあります。

印刷する場合、モノクロ印刷でも問題ありません。

はじめに ～作成の趣旨など～

骨子

- 1 奥州市の概要
- 2 地域活性化と循環型ビジネスの全体経緯
- 3 循環型ビジネスの経緯
  - (1)ビジネスモデル
  - (2)行政によるバイオマスエネルギーへの取組  
参考 奥州市バイオマスタウン構想(当時)
  - (3)農業者の取組
  - (4)酒井里奈氏(ファームステーション代表)の取組  
参考 酒井里奈氏の主な受賞歴等
- 4 「マイムマイム奥州」の交流人口拡大活動
  - (1)全体概要
  - (2)体験ツアー参加メモ
  - (3)及川久仁江氏の主な活動紹介
    - a. わがママ倶楽部
    - b. 「私の100年計画」
- 5 まとめ

謝辞・主要参考文献

## 骨子

ビジネス経験と発酵の専門知識を持つ酒井里奈氏は奥州市が推進していた米由来エタノールのエネルギー利用を化粧品利用に転換し循環型ビジネスを構築。地元で根差した活性化活動のリーダー的存在の及川久仁江氏と酒井里奈氏の2人が中心となって任意団体を設立、循環型ビジネスを核に交流人口拡大活動を展開。

### 1 奥州市の概要

- 岩手県内陸部南部に位置
- 面積993.3Km<sup>2</sup>、人口119,422人(2015年)
- 屋敷林(防風林)を配した散居景観を有する広大な水田地帯

### 2 地域活性化と循環型ビジネスの全体経緯

- 休耕田問題に農業者が「農業者アカデミー」等で対策を勉強し旧胆沢(イサワ)町のバイオマスエネルギー実証実験に参加
- ビジネス経験と発酵専門知識を持つ酒井里奈氏は米由来エタノール製造で参加。コスト問題でエネルギーから化粧品利用へ転換し資源の循環型ビジネスを構築
- 及川久仁江氏は地域活性化事業や団体を次々立上げ、地域活性化のリーダー的存在
- この2人が中心となり循環型ビジネス関係者と「マイムマイム奥州」(任意団体)を設立、交流人口拡大活動を展開

### 3 循環型ビジネスの経緯

- 飼料米からエタノールと蒸留粕を製造。エタノールは化粧品に加工。蒸留粕は鶏飼料に、鶏糞は米や野菜の肥料に循環
- 行政が休耕田対策にバイオマスエネルギー政策を推進
- 若手農業者は「胆沢型農業を考える会」を結成、その後「農業者アカデミー」でバイオマスや環境問題等を勉強。奥州市のバイオマスエネルギー実証実験に飼料米作付けで参加
- 酒井里奈氏はファームステーションを設立し米由来エタノール製造で参加。コスト問題でエネルギーから化粧品利用に転換し資源の循環型ビジネスを構築

### 4 「マイムマイム奥州」の交流人口拡大活動

- 環境と農業の問題に共感する仲間で作りたいという酒井里奈氏の提案で及川久仁江氏が代表となり「マイムマイム奥州」(任意団体)を設立
- 循環型ビジネスを核に地域を知ってもらう体験ツアーをビジネス化し、交流人口拡大活動を展開

### 5 及川久仁江氏の活動紹介

- 及川久仁江氏は若い頃から地域貢献活動に参加。ヨーロッパ視察で同行したグループの活動に刺激を受け活動が活発化
- 「わがママ倶楽部」を結成し、地域活性化事業立上げを担い運営はやりたい人に任せる方法で次々と起業
- 「農業者アカデミー」で環境と農業の問題を勉強、卒業論文で「私の100年計画」を発表
- 農村ワーキングホリデーでも活動

## 1 奥州市の概要

2006年2月20日に水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の5市町村が合併。農地の割合が高く、稲作を中心とした複合型農業により、県内屈指の農業地帯。交通の利便性の良さを背景に、商業集積が進み、工業団地等が整備され、伝統産業や基幹産業の事業展開が図られている。

### 位置・人口

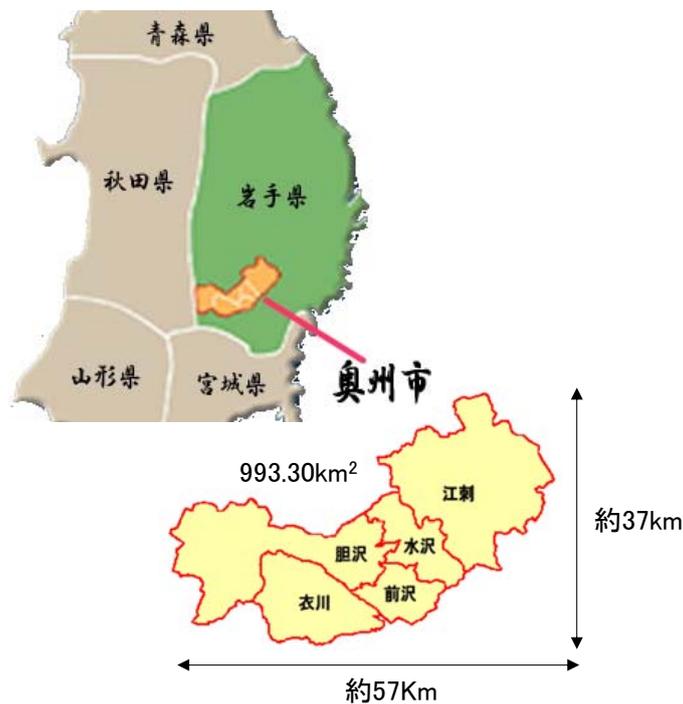
- 岩手県内陸南部に位置
- 盛岡市から約60km(東北自動車道で約40分)
- 面積 993.3km<sup>2</sup>
- 人口 119,422人(2015年)、県内3位

### 地勢

- 林野面積54.9%
- 土地利用 田(17.4%)、畑(4.5%)、宅地(3.8%)
- 屋敷林(防風林)を配した散居景観を有する  
広大な水田地帯



出所 東北活性研撮影

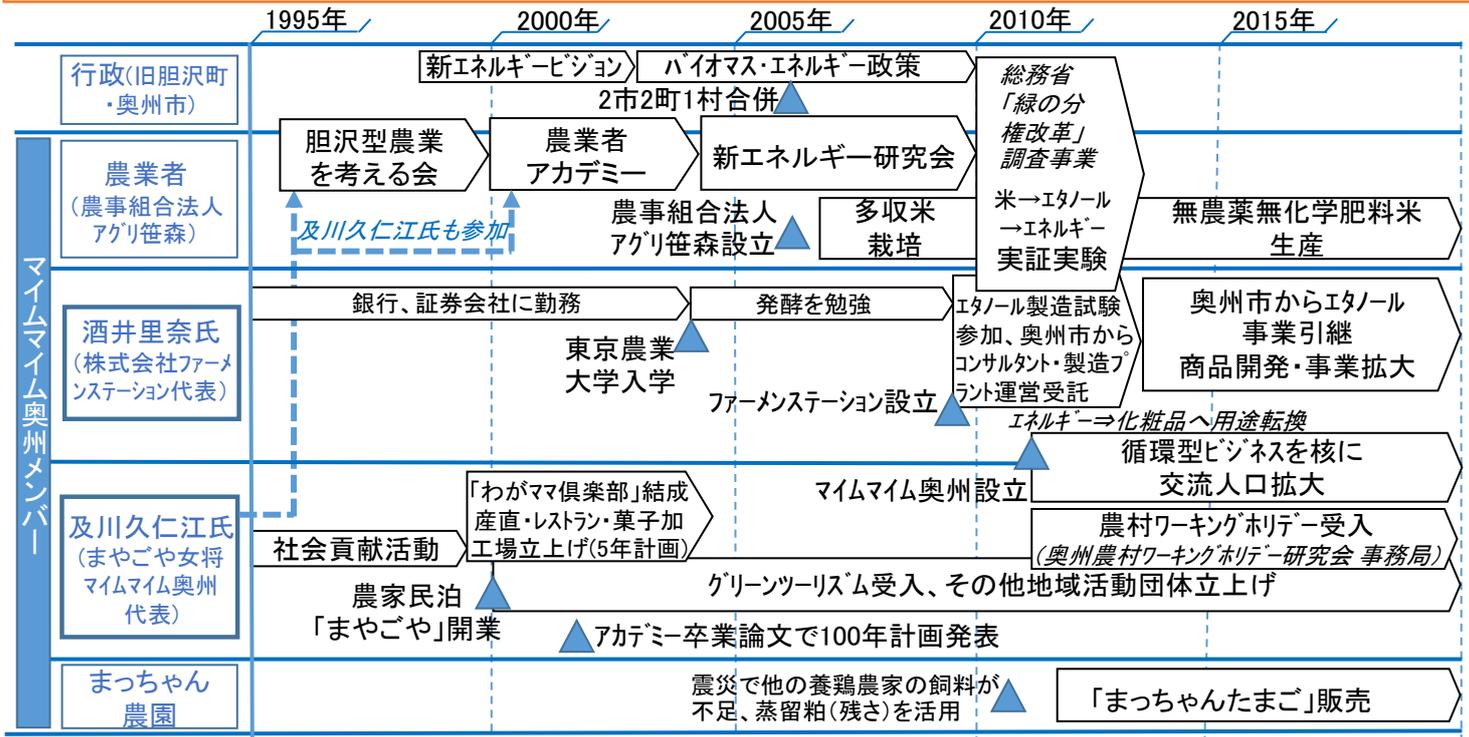


出所 奥州市ホームページ(2019年9月25日参照)より東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

## 2 地域活性化と循環型ビジネスの全体経緯

農業者が休耕田対策に奥州市のバイオマスエネルギー実証実験に参加。ビジネス経験と発酵専門知識を持つ酒井里奈氏はエタノール製造で参加。コスト問題でエネルギーから化粧品利用へ転換し循環型ビジネスを構築。地域活性化のリーダー的存在の及川久仁江氏と酒井里奈氏が中心となってマイムマイム奥州を設立し交流人口を拡大。



出所 奥州市総合政策部政策企画課地域エネルギー推進室「奥州市バイオマス構想」(2010年3月2日)、NewsPicks「国産エタノールで休耕田が再生している」(2018年9月15日)、復興庁「岩手・宮城・福島産業復興事例30」(2019年2月18日)、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成  
東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

9

1990年代、旧胆沢町は休耕田が増加し、当時の若手農業者は米作り衰退に危機感を持っていた。同様に、危機感を持つ当時の町長が農林課の職員に対策を考えるよう指示したことをきっかけに若手農業者が中心となって「胆沢型農業を考える会」を結成(1996年)した。研修会参加や農家レストラン、地域活動の見学等、農業活性化対策の模索が行われた。

その後、町主導で開催された「農業者アカデミー」(2年で卒業し2年毎に参加者を募集)へと移行(2000年)した。町の方針であったエネルギー自給をテーマに東北大学や東京大学の専門家を招いてバイオマスエネルギーや環境問題について勉強し、循環型農業へと関心が移った。

上記活動に参加していた若手農業者の一人で、以前より地域おこし活動に関心が強かった及川久仁江氏は、行政の支援を受けて「わがママ倶楽部」を結成(ママ友9人)した。やりたいことを5年計画にまとめ、官民協働で実行に移した。及川久仁江氏が行政との仲介役となって事業を立上げ、運営をやりたいメンバーに任せる方法で産地直売所、農家レストラン、お菓子加工場を次々と立上げた。また、「農村ワーキングホリデー」受入活動にも参加、地域活性化活動のリーダー的存在となった。

一方、若手農業者は休耕田を活用しバイオマスエネルギーを作れないかと検討していた。その時、東京農業大学がいろいろな廃棄物を原料にエタノールを製造する技術をもっていることを知った。農業者は原料に何を扱うか議論する中、古米や余剰米など米も使えることに気付いた。新エネルギービジョンを策定していた旧胆沢町は、東京農業大学に協力を求め、農業者(後に農事共同組合アグリ笹森を設立)と共に米由来バイオエタノールの調査を開始。奥州市合併後も多収米(飼料米)を休耕田に作付けし、東京農業大学とバイオエタノール製造試験を行った。

総務省「緑の分権改革」の支援を受け、奥州市が米エタノールのエ

ネルギー活用実証実験事業を2010年から3年間行った。その事業に、銀行や証券会社での勤務経験後に東京農業大学で発酵を学んだ酒井里奈氏(東京在住)が参加し、(株)ファームステーションを設立して奥州市からコンサルタントと製造プラント(奥州ラボ)運営を受託した。

事業開始直後に発生した東日本大震災(2011年)で、養鶏農家が飼料不足に見舞われ存続の危機に直面した。その時、エタノール製造の副産物の蒸留粕(残さ)が飼料(有機米から作られる蒸留粕は栄養豊富で、たまごや肉の品質向上に効果)として供給された。さらに残さを与えた鶏の糞は食用米や野菜の肥料として利用できることから循環の仕組みが形成された。

事業を進める中、エネルギー活用に採算性の問題が浮上し、それを解決できないまま終了することが想定されていた。酒井里奈氏は、エタノールが化粧品の原料に使用されほぼ100%輸入に頼っていることに着目しビジネスへの出口を見出した。定例会議の中でエタノールを化粧品原料に、残さを石けんに用途転換することを提案した。

実証実験事業終了後、ファームステーションは奥州市から事業を引継、国産エタノール製造販売ビジネスを開始した。休耕田に作付けた米から抽出するエタノールで化粧品を、残さで石けんを製造販売し、また、残さは鶏飼料へ、鶏糞は食用米や野菜の肥料へとユニークな資源循環型ビジネスが構築された。

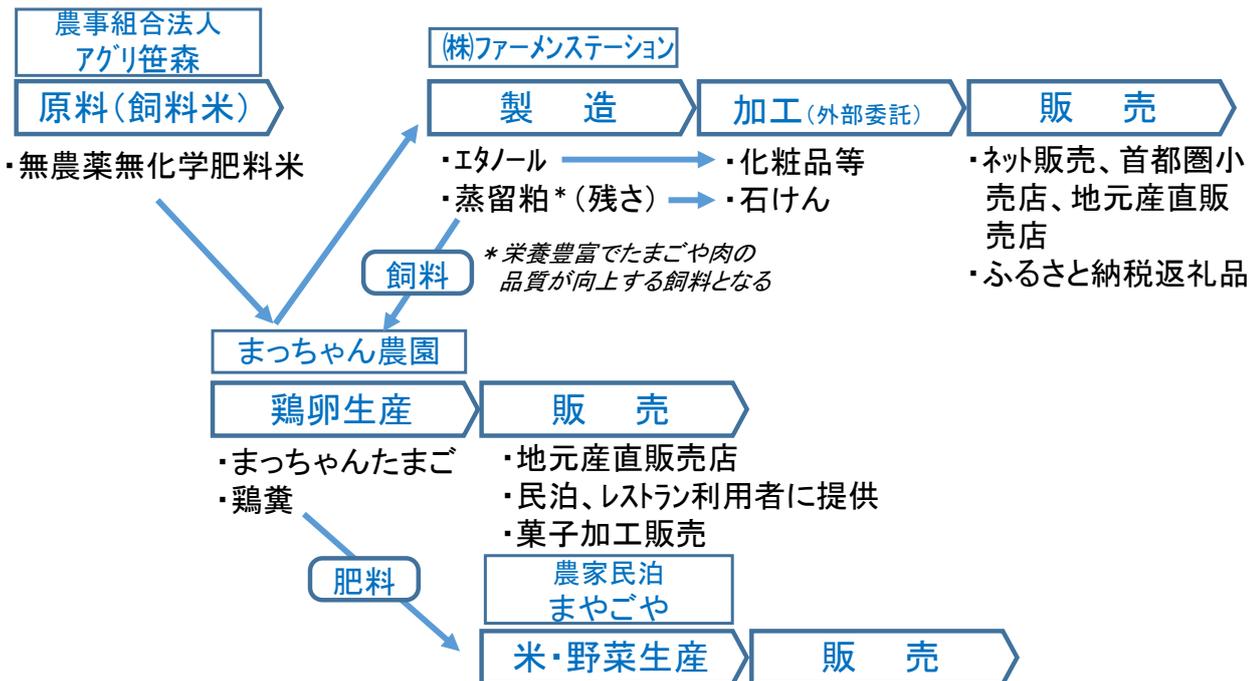
及川久仁江氏と酒井里奈氏が中心となり、循環型ビジネスを形成するメンバーが集まって「マイムマイム奥州」(任意団体)を設立した。循環型ビジネスを核に、地域を知ってもらう体験ツアーをビジネス化して交流人口を拡大する活動へと展開していった。

出所 奥州市総合政策部政策企画課地域エネルギー推進室「奥州市バイオマス構想」(2010年3月2日)、NewsPicks「国産エタノールで休耕田が再生している」(2018年9月15日)、復興庁「岩手・宮城・福島産業復興事例30」(2019年2月18日)、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

### 3 循環型ビジネスの経緯

#### (1) ビジネスモデル

アグリ笹森が休耕田を利用して生産する飼料米をまっちゃん農園(鶏卵生産者)が購入し、ファームステーションへ渡してエタノールと蒸留粕(残さ)を製造。蒸留粕を与えた鶏の糞は米や野菜の良質な肥料となる。ファームステーションはエタノールや蒸留粕を原料に化粧品や石けん等に加工。



出所 GEOC「2012年度環境NPO等ビジネスモデル策定事業・岩手の休耕田を活用せよ！米からエタノールとエサと石けんとスプレーを作る」(2013年3月)、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

### 3 循環型ビジネス構築の経緯

#### (1) ビジネスモデル

#### 循環図



出所 ファームステーション「FERMENSTATIONの循環図」より東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

### 3 循環型ビジネスの経緯

#### (2) 行政によるバイオマスエネルギーへの取組

旧胆沢町時代より休耕田、耕作放棄地を活用したバイオマスエネルギー政策を推進。地域の農業者も交え、東京農業大学と共同で米由来エタノールの製造技術を検証。国の支援を受け奥州市が実証実験事業を行ったが、エネルギー活用ではコストが課題として浮上。2013年の事業終了後、ファームステーションに事業引継。

##### 旧胆沢町

- 1998年度 新エネルギービジョン策定
- 1996年度～ 「胆沢型農業を考える会」支援 (詳細は25ページ)
- 2000年度～ 「農業者アカデミー」主導 (詳細は25ページ)
- 2003年度 新エネルギービジョン策定
- 2004年度 水田地帯におけるエネルギー作物のエタノール化等実証実験
  - ・東京農業大学と共同調査 (東北経済産業局補助)
- 2005年度～ 米のエタノール化技術等実証実験 (個体発酵法)
  - ・県と国の補助
- 2005年度 バイオエタノールに関する国際シンポジウム開催 (米国研究者2名招待)

##### 奥州市 (2006年に2市2町1村合併)

- 2006年度 新エネルギービジョン策定\* \*バイオエタノール以外に木質バイオマス、廃油バイオマス等の計画策定、実証実験を実施。
- 2007年度～ エネルギー用多収米の試験栽培
- 2008年度 環境基本計画策定
- 2009年度 東京農業大学と米の簡易個体発酵に関するバイオエタノール製造試験を市民公開
  - ・エタノール製造プラントは国の補助により導入
- 2010～12年度 バイオマスエネルギー実証実験事業
  - ・総務省「緑の分権改革」支援による奥州市事業
  - ・エネルギー活用では採算性に問題
- ～2013年度 バイオマス利活用事業を終了 → バイオエタノール事業をファームステーションに引継

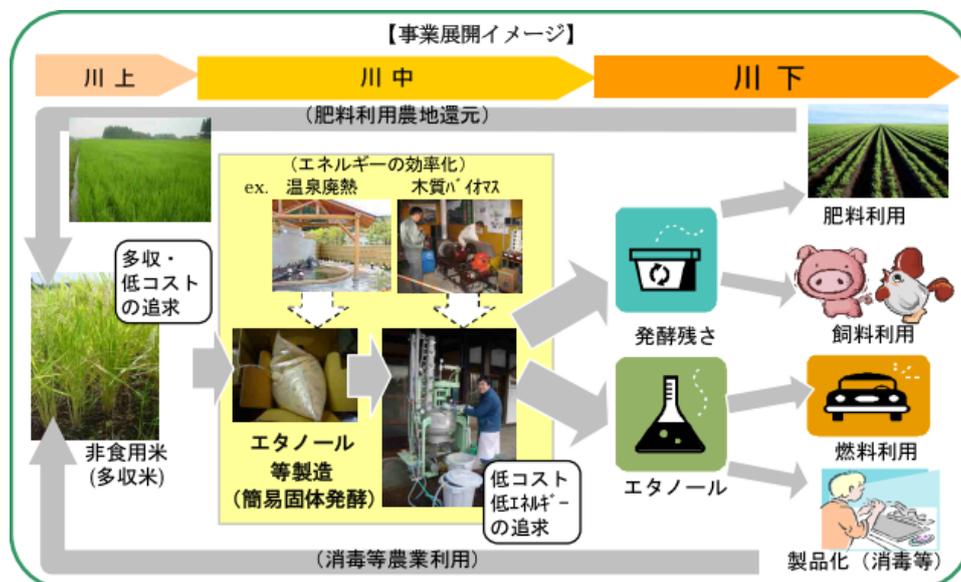
出所 奥州市「奥州市バイオマスタウン構想」(2010年3月2日)、奥州市「広報奥州」2011年5月Vol.63、復興庁「岩手・宮城・福島の産業復興事例30」、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

#### 参考 奥州市バイオマスタウン構想(当時)

#### 多収米等の資源作物を利用した燃料及び製品利活用システムの推進

転作田等に低コスト多収米等の資源作物を作付けし、これを原料として個体発酵技術等を用いバイオエタノールを製造し、地域内車両等の燃料として活用する。また、バイオエタノールを燃料用以外の用途として消毒剤等の製品化検討を進めつつ、発酵過程で生成される発酵残さについても高たんぱく畜産飼料や肥料、その他の資材利用など高付加価値化した製品利用の検討を進め、持続可能なバイオエタノールシステムを構築する。



出所 奥州市総合政策部政策企画課地域エネルギー推進室「奥州市バイオマスタウン構想」(2010年3月2日)よりバイオエタノールに関するプロジェクト部分を抜粋引用

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

### 3 循環型ビジネスの経緯

#### (3) 農業者の取組

若手農業者が「胆沢型農業を考える会」を結成。休耕田対策を町と一緒に検討。その後、行政主導の「農業者アカデミー」に移行。大学の専門家を招きバイオマスや環境問題について勉強、循環型農業へと関心が移行。休耕田を活用してエタノール製造用飼料米を作付け。その後、無農薬無化学肥料米栽培へと発展。

- 1996年～ 「胆沢型農業を考える会」結成 → 地域農業の危機感共有と農業活性化対策を模索
  - ・水田の耕作放棄地増加が地域課題
  - ・胆沢町長(当時)が農林課の職員に対策を考えるよう指示したのがきっかけ
  - ・若手農業者が中心となって結成
  - ・研修参加、農家レストランや地域活動の見学等実施
- 2000年～ 「農業者アカデミー」に移行 → 環境問題と農業を絡め、循環型農業へと関心が移行
  - ・町主導で開催
  - ・農林課職員と農業者で、町の方針にあるエネルギー自給をテーマに選定
  - ・東北大学や東京大学の専門家を招き、バイオマスや環境問題等を勉強
  - ・2年で卒業、2年毎に参加者を募集  
(及川久仁江氏が卒業論文「私の100年計画」を発表)
- 2004年～ 「新エネルギー研究会」立上げ
  - ・行政が進めるバイオマスエネルギー実証実験に参加
  - ・海外視察や国際シンポジウム開催
- 2006年 「農事組合法人\*アグリ笹森」設立 組合員27人(2018年現在)  
\*農業施設の共同利用や農作業の共同化などに取り組み、共同利益の増進を目的とする法人
- 2007年～ エタノール用多収米(飼料米)の作付け開始
  - ・その後、無農薬無化学肥料米を栽培
- 2018年 飼料米で有機JAS取得(全国2例目)

出所 NewsPicks「【日本初】国産エタノールで休耕田が再生している」、ファームステーションホームページ、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

15

#### 及川久仁江氏インタビューより

##### ■胆沢型農業を考える会

休耕田が増え、皆が危機感を持っていた時に、当時の胆沢町長が農林課の職員に「何かやれ」と言ったのが始まりです。私も会のメンバーに入っていました。農業活性化に参考になるものはないかと、研修に参加したり農家レストランや地域活動の見学等を行っていました。

##### ■農業者アカデミー

その後、町主導の「農業者アカデミー」に移行しました。農林課の職員と農業者との間で町が方針として謳っていたエネルギー自給をテーマに選定しました。東北大学の先生に来てもらいバイオマスの勉強をしました。また、東京大学の先生にも来てもらい環境問題の講演を聞いた時には「このままでは地球は危ない」と言われ、ショックを受けました。「農業者アカデミー」での勉強がその後の私の環境と農業の問題を考える活動に影響を与えました(卒業論文に「私の100年計画」を発表)。

バイオマスエネルギーの研修を受けた参加者から、胆沢町でもエネルギーが作れないかという話になり、トウモロコシや菜の花を減反地に植えることを考えました。その時、東京農業大学で発酵を研究していることを知り、いろいろな廃棄物等でエタノールが製造できることを聞きました。実際に東京農業大学へ見学にも行きました。原料に残った野菜や給食の残飯を使ってはどうかと議論する中で、古くなって食べられない米や余った米があることに気づき、飼料米作付けに繋がりました。

インタビュー:2019年12月5日

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

16

### 3 循環型ビジネスの経緯

#### (4) 酒井里奈氏(ファームステーション代表)の取組

酒井里奈氏は、国内銀行、外資系証券会社等勤務を経て、興味があった発酵を学ぶため東京農大に入学。卒業後、ファームステーションを設立し奥州市のバイオマスエネルギー実証実験事業に米エタノール製造で参加。コスト問題でエタノールをエネルギーから化粧品利用に転換。奥州市から事業引継後、エタノールビジネスを開始し循環型ビジネス構築。

- ～2005年 大学卒業後、国内銀行、外資系証券会社等に勤務
- 2005年 東京農業大学応用生物科学部醸造学科入学
  - ・地球温暖化や代替燃料等社会的問題に関心
  - ・発酵技術による未利用資源活用を勉強
- 2009年 卒業後、奥州市のエタノール製造試験事業に参加  
株式会社ファームステーション設立
  - ・東京都内に本社を置き、奥州市の「奥州ラボ」でエタノール製造
- 2010～13年 奥州市からバイオマスエネルギー実証実験事業を受託
  - ・コンサルタント業務とエタノール製造プラントの運営を担当
  - ➡ コスト問題によりエネルギー利用から石けん、化粧品利用へ用途転換を提案  
(エタノールが化粧品原料に使用されほぼ100%輸入にたよっていることに着目)
- 2013年 奥州市から事業(設備含む)を引継、国産エタノール製造販売事業開始
  - ・アルコール製造販売事業者免許取得
- 2014年～ ビジネス経験を活かして商品開発、事業拡大
  - ・石けん、消臭スプレー、ホテイルク等々商品化
  - ・クラウドファンディング、民間投資会社等から資金調達
  - ・リノカス等地域外の未利用品を使った商品開発、残さ活用で事業拡大

\* 現状の奥州ラボ設備で、適度な資源循環を構築

出所 NewsPicks「【日本初】国産エタノールで休耕田が再生している」、復興庁「岩手・宮城・福島 の産業復興事例30」、ファームステーションホームページ、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

17

#### 及川久仁江氏インタビューより

##### ■バイオマスエネルギー実証実験

米エタノール製造試験は当初、東京農業大学の大学院生が中心的に実験していました。関係者は皆、その大学院生が最後まで実験を続けるものと思っていましたが、ある日突然来なくなりました。その後、実験を引継いだのが酒井さんです。この一件がなければ酒井さんは来ることはなかったのです。

市の実証実験事業開始後、エタノールのエネルギー活用はコスト的に無理となりました。同じく実証実験を行っていた北海道の失敗事例も皆知っていました。酒井さんが化粧品や石けんへの活用転換を提案したのですが初めは理解されませんでした。何度も酒井さんが説明していく中、皆の考えが変わっていききました。方向性が定まらなかった当時、酒井さんと奥州市の職員、私の3人が集まり、どうしようかと暗くなっていたことを憶えています。

##### ■循環

飼料米は法律上、畜産農家との連携がないと作れません。ファームステーションに渡した飼料米は蒸留粕(エタノール抽出後の残さ飼料)となって戻ってきます。蒸留粕の原料によって家畜の食いつきが違います。飼料米を原料にした蒸留粕は鶏の食いつきがよく、腸内環境もよくなり、糞は臭わないので良質な肥料になります。鶏糞は私のところに回ってきて食用米の肥料に使います。現在まっちゃん農園の鶏は400羽いて、奥州ラボの設備の生産量で丁度良い循環ができています。

インタビュー:2019年12月5日

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

18

- 第3回DBJ女性新ビジネスプランコンペティション特別賞「地域イノベーション賞」受賞
- ブリティッシュ・ビジネス・アワード2014 Community Contribution 受賞
- 2018アグリテックグランプリ「新日鉄住金エンジニアリング賞」受賞
- 日本起業家賞2014ファイナリスト
- Creative Business Cup 2014 日本代表
- ソーシャルプロダクツアワード2014
- Global Brain Alliance Forum 2018のスタートアップ・ピッチイベント「Pitch Battle」にてオーディエンス賞受賞
- JR東日本スタートアッププログラム2018で青森市長賞受賞
- Forbes JAPAN 2019年9月号「People イノベーション女子」掲載
- 「EY Winning Women 2019」(女性起業家の表彰制度)のファイナリスト(6名)として表彰

出所 ファーマンステーションホームページより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

## 4 「マイムマイム奥州」の交流人口拡大活動

### (1) 全体概要

環境と農業の問題に共感する仲間で作りたいという酒井里奈氏の提案で、及川久仁江氏が代表となり「マイムマイム奥州」を設立。循環型ビジネスを核に地域を知ってもらう体験ツアーをビジネス化し交流人口拡大活動を展開。メンバーのやりたいことができる柔軟な組織。公的補助金は受けず事業収入から管理費用を充当。

設立	2012年
組織名	「マイムマイム奥州」(任意団体)
代表	及川久仁江氏
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農家民泊「まよごや」 及川久仁江氏と家族</li> <li>・(株)ファームステーション 酒井里奈氏と社員</li> <li>・農事組合法人「アグリ笹森」 織田義信氏(組合長)と組合員</li> <li>・まっちゃん農園 松本崇氏と家族</li> <li>・Uターンの若者、首都圏在住者等</li> </ul>
ミッション	「こめ、ひと、まわる。百年先も」 人もモノも循環することで100年先も1000年先も 生き続けるまちをつくりたい
事業目的	農村における循環型社会の構築と、農村と都市の人、暮らし、文化が交流する場づくり、コミュニティづくりを目指す
事業	環境保全や循環型社会をテーマとした体験ツアー(海外受入れ実績も多数)、ワークショップの企画、実施。講演、情報発信、物産の販売など
所在地	ファームステーション奥州ラホ <sup>*</sup>
事務局	ファームステーション

#### 「マイムマイム奥州」コアメンバー



及川久仁江氏  
(代表)



松本崇氏  
(副代表)



酒井里奈氏



織田義信氏

\*「マイムマイム」とは、皆で手を繋いで踊ろうという意味  
ハワイ語で「水」を意味し、米には必要なもの

出所 マイムマイム奥州ホームページ、及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

#### 及川久仁江氏インタビューより

##### ■ 設立とメンバー

任意団体として設立しました。酒井さんが一緒に活動する仲間とチームを作って、ファームステーションの奥州ラホに皆が集まる場所を作りたいと言っていたのが設立のきっかけです。「マイムマイム」とは皆で手を繋いで踊ろうというイメージで付けました。後で松本さん(まっちゃん農園)からハワイ語で「水」の意味と知らされ、米に必要な水に関係していて良い名前を付けたと思っています。

ホームページに掲載しているメンバーは4団体です。「アグリ笹森」の組合員は全員がメンバーで助っ人隊的存在。「まっちゃん農園」は松本さんと奥さんと子ども。「まよごや」は私と娘。ホームページに首都圏在住者であるのは酒井さんの知人で、いっぱいいます。メンバーの名簿は意味がないと思って作っていません。企画したイベントに来た人たちがその時のメンバーと思っています。

マイムマイム奥州は皆の未来の夢を実現しています。環境問題は難しく、農業も絡むとさらに難しくなって皆敬遠しますが、環境も農業もお互い絶対必要なもの。環境を考えながら農業をやっているかなければならないし、生活する方も環境を考えなければなりません。それらを大きな声で話し、納得して共感できるメンバーがやってきました。それだけでも幸せだと思っています。

##### ■ 運営

規約は以前同財団の助成金を受けるために最低限の内容で作りました。毎月総会のような会合を開催していますが、会計報告や監査等はありません。活動資金は取材や講演等の謝金で賄っています。内容によって金額は違いますが、地域おこし等の参考になるのであれば、いくらでも話したいと思っています。

運営に関して外部支援は受けていません。その分メンバーには専門家がいます。酒井さんはビジネス、アグリ笹森織田組合長は元

県職員で農政を担当、まっちゃん農園松本さんは農学。それぞれ得意分野を活かしています。

ビジネスとしてお金の匂いがしないとよく言われます。メンバーそれぞれの収益には格差はありますが、このメンバーが集まったからこそ、それぞれ相乗的に活動が広がっています。

##### ■ 体験ツアー

体験ツアーをやりたいというのが酒井さんのたつての願いでした。東京からこの地に来て人に会い、魅力を感じ、良さが分かった。それを他の人にも知ってもらいたいと言っていました。私も人に来てもらうことを目標にしました。ネット販売だけでなく、この場所に来ないと分からないもの、食べられないものがあります。酒井さんがいろんな企画を持ってきて、それにどう対応するかとやっていくうちにチームが育っていきました。

##### ■ 持続可能性

メンバーは20代から60代まで各年代にいたため、後継の心配はありません。また、行政の補助金は受けていません。中で調達することが団体運営を持続可能にしていると思っています。

##### ■ 課題

会計管理等の事務局業務はファームステーション奥州ラホの職員がやっています。課題は事務局の人員費をどう生み出していくか。人員費を捻出するために大きく負担になることをやるのは本末転倒。自分たちが楽しんで長くやるのであれば、皆で簡単に会計ができるようなものになりたい。目的は自分たちの活動を知ってもらい、地域を知ってもらうこと。目的を見失わないようにしなければなりません。

インタビュー:2019年12月5日

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

## 4 「マイムマイム奥州」の交流人口拡大活動

### (2) 体験ツアー参加メモ

食(循環型農業で採れた米や野菜、たまごや昔ながらの農家の味)、地域(米作の水源、散居景観)、地場産業(前沢牛、南部鉄器)、歴史(正法寺)の4つの体験と、ファームステーション奥州ラボを見学するツアー。更に、ファームステーションがリンゴ搾りカスから抽出したエタノール残さ飼料で育てた牛肉ランチを堪能。

ツアー名 : 「いわて奥州～盛岡 食の循環を旅する秋の新米と希少牛を楽しむ地域循環ツーリズム」

日程 : 2019年11月13日～14日

参加者数 : 14名(東北活性研より1名参加)

添乗者 : 酒井里奈氏、ファームステーション社員1名

#### ■1日目

##### ①古民家(セミナーハウス)で新米ランチ

- ・マイムマイム奥州メンバーが出迎え
- ・循環型農業で採れた新米、野菜、たまごや昔ながらの農家の味を楽しむランチ
- ・炊飯釜は及川氏拘りの「ぬか釜」\* (南部鉄器「及源製造」特注品)を使用 \*「私の100年計画」(p.31)に記載あり
- ・奥州市商業観光課職員による奥州市の紹介



セミナーハウス



ぬか釜



胆沢ダム

##### ②胆沢ダム見学

- ・水田の水源となるダムを見学

##### ③見分森公園展望台見学

- ・散居景観を有する広大な水田地帯を見学



見分森公園展望台

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

##### ④奥州市牛の博物館見学

- ・前沢牛について見学(地場産業)

##### ⑤ファームステーション奥州ラボ見学

- ・エタノール抽出設備、工程の説明等
- \*通常、奥州ラボの見学はツアー参加者のみ許可



ファームステーション奥州ラボ

#### ■2日目

##### ①及源製造株式会社見学

- ・南部鉄器製造工場見学(地場産業)
- ・南部鉄器製品買い物

##### ②正法寺見学

- ・地域の歴史に重要な寺院を見学
- \*地元食材を使った精進料理を提供しており、マイムマイム奥州との連携を検討しているとのこと



正法寺

##### ③ホテルメトロポリタン盛岡で希少牛ランチ

- ・ファームステーションがJR東日本スタートアップ(株)との協業で、青森リンゴ搾りカスから抽出したエタノールの残さ飼料で育てたジャージー黒牛(ジャージーと黒毛のミックス:岩手県雫石町中屋敷牧場で飼育)肉のランチ



希少牛ランチメニュー

出所 東北活性研作成(写真含む)

23

## マイムマイム奥州のパンフレット



表面

裏面

### これからの農村と都市を考える。

岩手県奥州市の休耕地(有効活用されていない田んぼ)から始まった地域循環型プロジェクトを営むチーム、マイムマイム奥州。これまで、農村と都市の4つの事業者が主体となって、米を別の資源に変えながらバトンをつないできました。

錬金術のように米が循環し、出会うことのなかった人々が出会い、世代や国境を越えた新しい集いが生まれました。

そして今、私たちは、100年後の農村のあり方を考えています。消費される資源や日常にとらわれず、自分たちでできることを楽しむ暮らし。農村と都市が出会いの連鎖を続けて、自由な多様性をはぐむ社会。

私たちは「都市とともに生きる農村」の可能性を信じています。



出所 ファームステーション提供より東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

24

## 4 「マイマイン奥州」の交流人口拡大活動

### (3) 及川久仁江氏の主な活動紹介

及川久仁江氏は若い頃から地域貢献活動に参加、行政や地域活動者との人脈を構築。ヨーロッパ視察を契機に活動が活発化。農家民泊「まやごや」開業や「わがママ倶楽部」を結成し5年計画で地域活性化事業を次々起業。農村ワーキングホリデー受入や地域活動団体の立上げ等を行い、地元根差した活性化活動のリーダー的存在。

- 1987年～ 父親の反対を押し切って就農(23歳)
  - ・各種団地で地域貢献活動に参加、行政関係者や地域活動者との人脈構築
- 1996年 「胆沢型農業を考える会」に参加
- 1998年 グリーンツーリズム先進地のヨーロッパ視察参加
  - ・同行した山形庄内地方のママさんが農業法人を立上げて活動していることに刺激を受けて帰国
- 1999年 「わがママ倶楽部」結成(旧胆沢町が支援)
  - ・1999年9月9日9人(及川久仁江氏のママ友、地域外から嫁いで来た人たち)でスタート
- 2000年 「わがママ倶楽部」5年計画作成 (p.27参照)  
「農業者アカデミー」に参加
  - ・バイオマスや環境問題を勉強、循環型農業へと意識が変化農家民泊「まやごや」開業、グリーンツーリズム受入
  - ・及川久仁江氏の自宅馬小屋を改装
  - ・共感する仲間が集まる拠点としても活用
- 2002年 「農業者アカデミー」卒業論文「私の100年計画」発表 (p.31参照)
- 2003年 産直フリーマーケット「おだづめ」開業 } 及川久仁江氏は事業立上げまでを行政との仲介役で推進
- 2004年 農家レストラン「まだ来すた」開業 } その後は「わがママ倶楽部」のやりたいメンバーが事業運営
- 2004年 菓子加工場「おやつ屋」開業
- 2012年 「マイマイン奥州」設立、代表に就任  
農村ワーキングホリデー受入 (p.26参照)
- 2013年～ 「胆江(タンコウ)農村ワーキングホリデー研究会\*」事務局 \*2016年「奥州農村ワーキングホリデー研究会」に改称  
「ごっつお研究会」(地域のお母さんたちとの料理研究会)立上げ、  
「風土・Food・風人(ふうど・フード・ふうど)」(岩手地産食材を使ったイベント)立上げ等

出所 マイマイン奥州ホームページ、及川久仁江氏インタビュー、和歌山大学観光学部・農山村セミナー「農村ワーキングホリデーのいざないVer.2」より  
東北活性研作成 東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

25

### 及川久仁江氏インタビューより

#### ■活動の背景

女性で農業を始めたことが珍しかったことから町長の目に留まり、何かあると声を掛けてもらえるようになりました。

東日本大震災後、農家民泊「まやごや」で受入していたグリーンツーリズムのお客が来なくなりました。和歌山大学OBの県職員が和歌山大学観光学部(国立大で唯一の観光学部)の先生に相談しに行きました。それが縁で農村ワーキングホリデー(農業や農村に関心を持ち、田舎暮らしや農作業をしてみたいと希望する都市住民に、繁忙期で猫の手も借りたい地元農家が寝食を無償で提供する仕組み)受入を提案されました。

旧江刺市はターンで地域外から来た農家が何軒かあって、農村ワーキングホリデーの関係で知り合いました。年代は離れていても自由な発想で話ができました。その人たちが持込んだ新しい“風”のお陰で私も自分の活動がやり易くなっていました。その人たちと関わりを持てたことはラッキーだったと思っています。

#### ■行政との関係

過疎地に人を呼び込むチャレンジは行政を当てにせずにやっています。

奥州市合併後も旧胆沢町のことを担当する職員がいて、施設の借用や地域おこし協力隊との連携等で相談させてもらい、とても助かっています。担当職員が異動しても繋がりをもっていて、いろいろ協力してもらっています。

#### ■理想の活動

私は20代の頃に青年会に入り、農村ミュージカルで脚本から作ったのが初めての取組で、これまで誰もやらなかったことを企画・実行してきました。しかし、何年かすると縮小してなくなりました。その後、農業クラブや町民劇場等数えきれないほどの団地で活動してきました。自分たちが楽しくやっていたらきっと誰かがやって来ると思っていたのですが、それには40年かかりました。理想の形は「マイマイン奥州」です。最近立ち上げた「ごっつお研究会」(地域のお母さんたちとの料理研究会)、「風土・Food・風人(ふうど・フード・ふうど)」(岩手地産食材を使ったイベント)等もほぼ理想に近いものになっています。

インタビュー:2019年12月5日

出所 和歌山大学観光学部・農山村セミナー「農村ワーキングホリデーのいざないVer.2」より東北活性研作成

## 4 「マイマイン奥州」の交流人口拡大活動

### (3) 及川久仁江氏の主な活動紹介 a. わがママ倶楽部

「わがママ倶楽部」は及川久仁江氏(代表)が子育て世代を集めて設立。やりたいことを5年計画にし、行政が支援。及川久仁江氏が行政との仲介役で事業立上げまでを担い、運営はやりたいメンバーに任せる方法で、産直所、農家レストラン、菓子加工場を次々と開業。計画完了5年で解散。各事業はそのままビジネスとして継続。

#### 設立

- ・ヨーロッパ視察後に及川氏の地域活性化活動への関心が増大したこと、旧胆沢町農林課の提案がきっかけ
- ・1999年9月9日9人でスタート
- ・地域外から嫁いで来た子育て中の30代のママさんが中心
- ・当初、小遣い稼ぎが目的

#### 5年計画

- ・やりたいことをまとめた「5年計画」を作り、メンバーで共有(p.29参照)

#### 実行

- ・産地直売所「おだづめ」、農家レストラン「まだ来すた」、お菓子加工場「おやつ屋」を開業
- ・立上げまでは及川久仁江氏が町との仲介役となって推進、その後はやりたいメンバーに任せる形で事業運営

#### 行政(旧胆沢町)

町関係者と人脈構築できていた及川氏に町から地域活性化活動の働きかけ

町も計画を共有し、実行を支援

町の施設(古民家を活用したセミナーハウス)を活動拠点に提供  
事業立上げを支援  
マスコミ等への広報活動を支援

計画完了の5年で解散 \*メンバーの子育ても終わり、各事業はビジネスとして継続

出所 及川久仁江氏インタビューより東北活性研作成

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

27

### 及川久仁江氏インタビューより

#### ■設立

「胆沢型農業を考える会」に参加した時、夢のような計画をいくつか作りました。その中に農家レストランを作るというのがありました。それを実現することになり、町の職員から女性がやった方がいいと言われ私が担当することになりました。メンバーを集めることになり、声を掛けたら娘のママ友が9人集まりました。偶然、1999年9月9日にメンバー9人で設立しました。メンバーは地域外から嫁に来た人たちで、30代中心の子育て中のママさんたちでした。

#### ■5年計画

当時、メンバーは専業主婦が多く、小遣い稼ぎ程度の活動を考えていましたので、経験のない農家レストランの運営をしてくれるメンバーがいるか不安でした。そのため、私は農家レストラン立上げに時間をかけて10年程度の計画で進めようと考えていましたが、町からは「待てない、5年以内に進めろ」と言われました。それをメンバーに伝えると進まなくなるため、簡単な野菜売りから順に始めることを考えました。毎週メンバーが集まってやりたいことの計画を練り、5年計画(p.29参照)を作ってメンバーで共有しました。町も共有して官民協働で実行することになりました。

#### ■実行

私は町とメンバーの間に入って計画を進めました。町の支援を受けながら産直「おだづめ」、お菓子加工場「おやつ屋」、農家レストラン「まだ来すた」の立上げを進め、運営はメンバーのやりたい人に任せました。結果的に私たちがやりたかったことを町が吸収し、準備してくれる形で進めてもらいました。

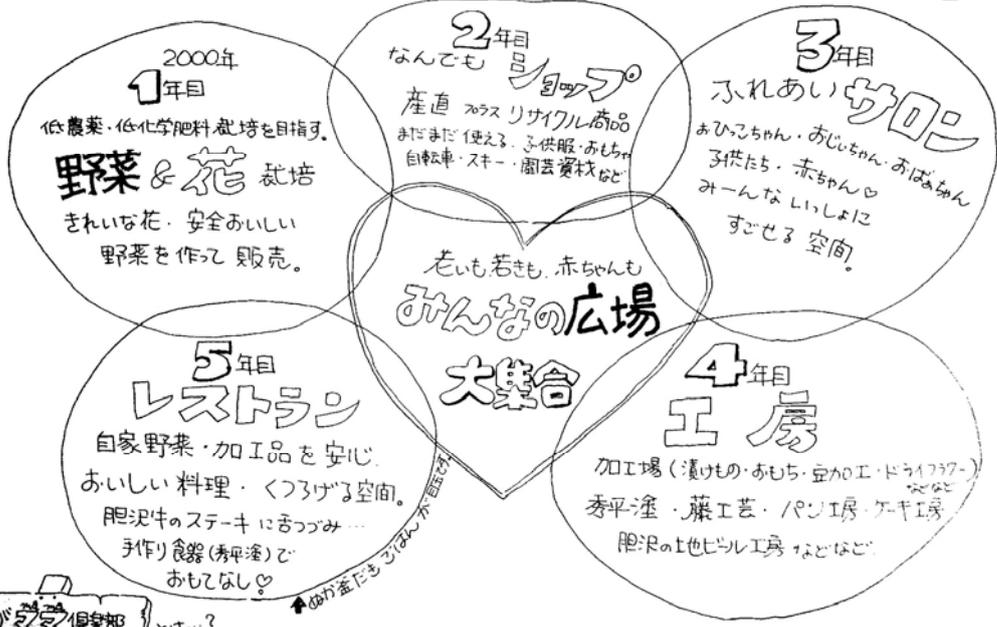
農家レストランは当時珍しい時代だったため、やると決まったら開業前からマスコミの取上げが凄かったです。町が広報に動いたのと、農家の30代のママさんが活動していたことも珍しかったのでしょ。

「わがママ倶楽部」は計画通り5年で解散しました。偶然にも、メンバーは5年で子育ても終わり、それぞれの事業は普通のビジネスとして運営を続けています。

インタビュー:2019年12月5日

「自主クルフ」『わがママ倶楽部』が目指す 5年計画(案)です!

すでに1年目がスタートしています。



わがママ倶楽部 とは...?

胆沢町内の子育て、お最中のお母さんたちの集まりです。「子育てしながら、町も育てて行こう!!」という  
かんばる、あかあせなクラブです。(3月現在、会員は20名にのびました)

出所 及川久仁江氏より提供

# 4 「マイマイン奥州」の交流人口拡大活動

## (3) 及川久仁江氏の主な活動紹介 b. 「私の100年計画」

「農業者アカデミー」の卒業論文として発表。1998～2098年の100年計画。「わがママ倶楽部」の5年計画ともリンク。SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) が国連サミットで採択(2015年)される前から地球環境の持続可能性という視点で計画を作成し、実践。第1回「明日の農山漁村を担う女性表彰」で農林水産大臣賞受賞。

### 私の100年計画 2002年3月作成

1998年 34才 1月 「わがママ倶楽部」を立ち上げ、5年計画を作成。パンフレットをもって宣伝に歩いた。

99年 9月 わがママ倶楽部を立ち上げ、5年計画を作成。パンフレットをもって宣伝に歩いた。

2000年 4月 農林アカデミー入学 (5人入学) 2年間で勉強し思った事

01 地球を守りたい 農村で生きること

02 3月 卒業 産直フリーマーケットホフン 農家のみなさんで作ったチームです

03 農民食道 加工工房 農村民泊 ホフン 馬屋小屋

めがまご ごはん

「どうして農村の良さがわかってくる」  
「どんどん私たちの意識が変化していきます」  
わがママ倶楽部 → あるがまま倶楽部 変身!!

下へ続く

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)

上から続く

08 44才 <10年組> めがまご 30才

18 54才 <20年組> めがまご 30才

28 64才 <30年組> めがまご 40 15才

38 74才 50 25

48 60 35 10才

58 70 45 20

68 80 55 30

78 65 40 15

88 75 50 25

98 <100年組> 85 60 35 10才

めがまごが来た!! 鳴り、じわじわ...と  
お風呂とストーブは薪・こたつはマタン・電気は風力と太陽エネルギー・油は菜の花・廃油は車の燃料は...  
自然にできるだけ逆らわず...

あるがままに生きよう

楽しい 自給自足 みんなで やれば 可ばらしい

地球を 君たちが生き伸び ゆくことを 夢みて

ずーと ずーと...

出所 及川久仁江氏より提供

本稿では、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネス（CBSB）の国内でもユニークな例である岩手県奥州市の事例を紹介しました。

本事例の循環型ビジネスはビジネス知識と発酵の専門知識を持つ東京在住の酒井里奈氏が構築したもので、小規模ながらも地域資源が循環しています。行政が推進するエタノールのエネルギー活用実証実験でコスト問題を解決できずに終了しそうな中、酒井氏は化粧品活用に着目し用途転換したことが循環型ビジネスへと繋がりました。これは優れた起業家実践していると言われるエフェクチュエーション（実効理論：経営学者サラス・サラスバシー）の行動原則の1つ「レモネードの原則」（ネガティブな要因を新たな付加価値を持つ製品に転じる）の例と言えます。

また、地元根差した活性化活動のリーダー的存在である及川久仁江氏と酒井氏の2人が中心となって設立したマイムマイム奥州（任意団体）は循環型ビジネスの体験ツアーを企画し交流人口拡大を図っています。この団体は志を一緒にするメンバーのやりたいことができる柔軟な組織であり、今後も面白い活動を展開することが期待されます。

本事例は東京に本社を置く会社が運営するビジネスの事例ですが、できれば地域に本社を置く会社が運営することで、より多くの付加価値（税収等）を地域にもたすことが可能であることをひとつ付け加えておきたいと思えます。

## 謝辞・主要参考文献

### 謝辞

本稿の作成に当たっては、以下記載の方々より取材対応や資料提供等、多大なるご協力を賜りました。

マイムマイム奥州

代表 及川久仁江様

株式会社ファームステーション

代表 酒井里奈様

渡辺麻貴様

社員の皆様

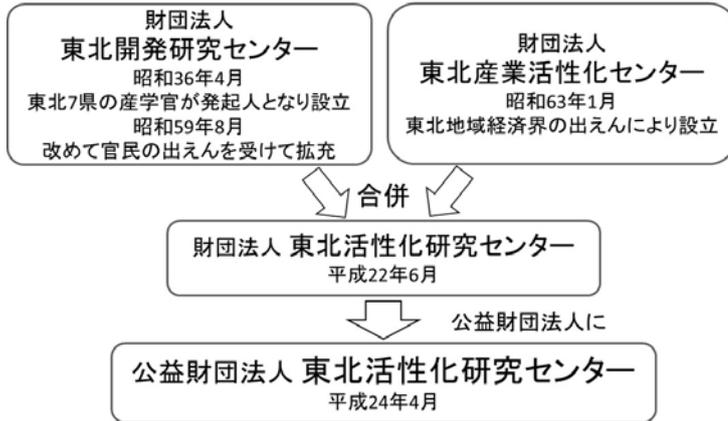
以上の方々、ならびに間接的にお世話になりました方々に心より感謝申し上げます。

### 主要参考文献

- 奥州市総合政策部政策企画課地域エネルギー推進室、2010年3月2日、『奥州市バイオマスタウン構想』、奥州市ホームページ
- 奥州市、2011年5月、『広報おうしゅう』Vol.63、奥州市ホームページ
- NewsPicks、2018年9月15日、『【日本初】国産エタノールで休耕田が再生している』、NewsPicksホームページ
- 復興庁、2019年2月18日、『岩手・宮城・福島産業復興事例30 想いを受け継ぐ次代の萌芽』、復興庁ホームページ
- 地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）、2012年3月、『2012年度環境NPO等ビジネスモデル策定事業・岩手の休耕田を活用せよ！米からエタノールとエサと石けんとスプレーを作る』、GEOCホームページ
- 『マイムマイム奥州』ホームページ
- 『株式会社ファームステーション』ホームページ
- 和歌山大学観光学部・農山村再生ゼミナール、2018年8月、『農村ワーキングホリデーのいざないVer.2』、和歌山大学ホームページ

## 東北活性研とは

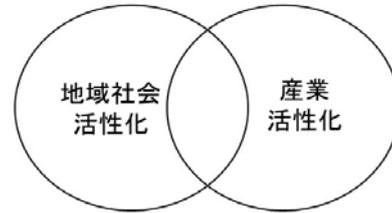
東北活性研は前身組織の創立以来、半世紀以上にわたって東北圏（東北7県と新潟県）の地域振興に取り組んでおります。



### 【活動理念】

知をつなぎ地を活かす  
～連携力で地域社会と産業を活性化する～

### 【ドメイン】



### 【ミッション】

- ・課題解決のための「知」が生まれる場になる
- ・課題解決のための「人」が育つ場になる

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)



コミュニティビジネス・ソーシャルビジネスの事例調査  
～岩手県奥州市における循環型ビジネスの事例～

2020年3月 発行

発行者・問合せ先

公益財団法人 東北活性化研究センター

〒980-0021

宮城県仙台市青葉区中央2丁目9番10号 セントレ東北9F

info @ kasseiken.jp 022-225-1426

東北活性研(公益財団法人 東北活性化研究センター)